

夜回り（前編）

高田三郎

「町内会で夜回りを始めたんですか」

と南八班の班長が、会議室に入るなりいった。
た。

「あのチャキチャキって音だろう。私も誰がやっつてんだろうって思ってたんだよな」

町内会副会長の坂田が応じた。思い当りげな顔をしている人もいるが、何人かは怪訝な顔をしている。

「じゃあ、誰がやっつてんだ」

南八班班長は、流行はやりの軽めのダウン・コートのポケットに手を突っ込んだままつぶやいて首を傾げた。

役員会の開会には少し早いので、町内会長はまだ来ておらず、他の班長達もまばらにしか来ていない。

「みんな集まったら、誰か心当りがなか聞いてみよう」

副会長がそう受け止めた。

確かに、ここ数日、宵の口と行って良い時刻に、拍子木を打つような音を、多くの人が聞いていた。聞いた人は大抵が夜回りを思い浮かべた。しかし、昔ながらの夜回りなら、「火のよーじん」とかいった後に「チャキ、チャキ」と来るのに、一定間隔の音だけなのだ。その日によって間隔が違う。南八班の班長も、何だろうと思いつつ、その正体を確かめることもなく町内会の役員会で聞いてみようと思ったのであった。

役員会が始まって真っ先きに、司会の副会長はその問いかけをした。しかし、役員の間もがその正体を知らなかった。副会長は、「じゃあ、跡でもつけてみるか」

と納めて、準備された議事に移っていった。昨冬は、町内のさる家からボヤが出て、その時は大事になることなくすんだのだが、この秋には、隣の団地で、空き家から火が出て、あたりの都合四軒が全半焼した。だから、こ

の話聞いたとき、町内会役員も自ずと夜回りを頭に浮かべることになった。

会合の最後に、もう一度、その話題になった。しかし、これといった情報や意見が出ることもなく、結局、副会長が、そのうちに確かめてみよう、と行って終わった。

「さあて、チャキチャキを追跡してみるかと夕飯をすませた副会長の坂田は、ヤツケを着込み玄関を出た。

この団地は、一九七〇年代後半から雑木林だった台地を切り開いて造成され、その後、八〇年代中頃におおむね今の姿に出来上がった。戸建ての住宅が約六〇〇戸近く並んでいる。南・北・中央の大きなブロックからなり、各ブロックには公園があつて、それを中心に、地形に応じやや不規則なところがあるもの。道路に囲まれた小さなブロックに家並みがまとめられていた。その小さなブロックが班の基本をなしていた。

坂田の家は、南十二班に属し、玄関前から屋根越しに南公園の楠の木が夜空にシルエツトを見せていた。坂田は、そのシルエツトを見やりながら、チャキチャキが聞こえないかとしばらくの間、聞き耳を立てたが、聞こえてこない。立っているうちにブルツと震えがきた。一旦、家の中に戻ることとした。テレビのニュースを見ていると台所から妻がいった。

「おとうさん、ほら、あの拍子木」

坂田は、厚めの防寒コートを着けながら外へ飛び出した。南公園のあたりから聞こえてくる。急ぎ足でそちらに向かった。ちょうど、「火のよーじん」は聞こえない。な間隔で繰り返されているのだが、「火のよーじん」は聞こえない。

公園の北側に沿った比較的長い直線道路に出たところで、ずっと向こうを歩く人の影が見え、その人がチャキチャキとやっているらしい。坂田は歩速をあげた。と、人影が右へ

と消えた。公園に入ったようである。坂田は、小走りに公園まで行って垣根越しに眺めてみたのだけれど人影は既になかった。公園は、八十メートル掛ける四十メートルほどの長方形で、東半分が台地の末端にあたる高台であり、そこからコンクリートの幅広の斜面が下っていて、子どもたちはよく滑り台として遊ぶ。その脇には階段もある。下の段は芝生が植えられていて、子どもたちはサッカーなどをして遊ぶ。北西角はゲートボールの練習場として土面になっている。南の辺に沿って、ジャングルジムやブランコ、鉄棒が並んでいる。公園全体に腰高の網で垣根がしつらえられている。南と北の辺の中央にはそれぞれ公園入口が開いている。坂田は、北の入口から中に入り、階段を登り上の段に登って下の段や木陰をすかしてみたら人影は見えない。ぐると一回り歩いてみたけれど、結局、それらしい人影は見えず、チャキチャキは聞こえてこない。少しの間、

きよろきよろうろしてみて結局、何の成
果もなくその日の追跡は終わった。
次の夜も、夕飯後しばらくして聞こえてき
た。坂田は、飛び出した。今日は、公園より
南遠方から聞こえてくる。団地の南端に長く
伸びる南二班の方向かららしい。坂田は、近
道を取って南二班方向へ急いだ。
やはり一定間隔で、今日はチャキチャキチ
ヤキとやっている。ワルツのように最初だけ
強い。坂田は、自分ではリズム感がない方だ
と思っっている。でも、どう聞いてもワルツで
ある。ワルツの夜回りなど聞いたことがない。
音の移動具合から判断して公園に向かって
いるらしい。坂田は、方向転換して公園に向
かった。南入り口から公園に入っていく姿が
見えた。坂田は走った。公園の南西隅にはブ
ランコが並んでいて、蛍光灯の街灯がその辺
りを照らしている。街灯の脇から公園をのぞ
いてみたが、誰もいる様子がない。南の入口
から入って眺め回しても誰の姿も見当たらな

い。チャキチャキは消えてしまった。結局、この日も見失って終わった。家に帰ってから坂田は、音が聞こえる方向を思い出してみた。すると、追跡開始前は、多分、公園の周辺からばかり聞こえていたように思う。追跡を始めてから、時に団地南方からも聞こえるようになった。それから三日間ほど、公園と南方の両方に気をつけて追跡してみた。その結果、偶然としか思えないのだけれど、まるで坂田の裏をかくように違う方向で音がしはじめ、結局、見失ってしまふのだった。その日、坂田は、夕飯を待ちながらそれまでを振り返ってみた。始まる時間は、七時過ぎ。チャキチャキが続く時間は十五分か二十分くらいで、さほど長くはない。聞こえてくる区域は、多くは南公園の周辺であり、終わるのはほとんどが公園である。公園に入ると人影は消えてしまう。団地の南端周辺だけで終ることがたまにある。

自転車を使ってみても良いなと考えた。

坂田は、子どもの頃に読んだ江戸川乱歩の探偵小説『怪奇四十面相』を思い出していた。高い塀の続く一本道で追われて姿をくらました怪人が、実は、通りに立っていたポストに化けていたという話である。しかし、この公園には、そんなポストはないし、と思ったとき、坂田は、ハツと気がついた。公園低地の北東隅、楠など樹木の陰に物置がある。

「おい、チョット出てくる」

「あら、お夕飯出来たのに。召し上がってからにしたら」

「いや、すぐ帰ってくる」

と、行って飛び出していった。

(つづく)

夜回り（後編）

高田三郎

物置に、きっと手掛かりがあるに違いない。そこには確か、団地の老人会が植木や草花の手入れに使う用品をしまつてあるはずだ。ゲートボール用品、緊急避難時のテントなどもあつたかも知れない。坂田は、町内会の新任役員が町内を見回ったときにそうした物を見た記憶がある。

公園に近付くと、坂田の目にその物置が見えてきた。間口は一間半もあろうか、奥行きも一間ほどに見える。坂田は、四枚扉の真ん中を左右に開こうとした。が、開かない。鍵がかかっているのだ。後ろに回ってみると、電灯線が引き込まれている。明り取りの飾りガラスの窓があるが、一枚ガラスで外からは開かない。その窓に街灯の光が写っていた。「鍵が掛つていて開けられないか。はじめからここで待つのもひとつの手かもしれないが、

物置待機と自転車との両面待ちとするか」

とひとりごちて夕食に帰っていった。

夕飯をすませ、自転車で公園に向った。街灯の光で町内会名簿に付いている地図を眺めながら待つことにした。すぐに、チャキチャキが団地南方から聞こえてきた。待とうかどうか、一瞬迷ったが自転車を飛ばした。平坦な一本道の彼方を歩いて行く後姿が薄暗闇を透かして眼に入った。自転車のスピードを上げた。

「こんばんわ」

自転車を止め、後ろから声を掛けた。

「こんばんわ」

振り返ったのは、夜目には三十歳過ぎくらいにみえる男性であった。

「あ、もう、失礼ですが、この町内の方ですよ
ね」

「はい、そうですが」

「私は町内会の副会長をやってる坂田といいます
ますが、夜回り、いつもおつかれさまです」

「はあ？」

「いえ、毎日のように夜回りをされておいでですよね」

「ええ、まあ……」

「夜回りじゃないんですか」

「ええ、これって、夜回りに見えますよね。当然です」

「見えますよね、って、夜回りじゃないんですか、本当に」

「はい、これ、ドラムのテンポとリズムの訓練なんです」

「え？それ何のことですか」

「お分かり頂けないですよ。でも、ご迷惑でした？」

「い、いえ、その、ただ、夜回りだとすると、ずいぶん奇特な方がいらっしゃるもんだ、と思っただけものでして」

「ああ、そうでしたか。いえね、私はオーケストラのパーカッションを受け持ってるんです。でも、いままで、ブラバンや素人バンド

のドラムをやったただけですから、リズム感が不安定なんです。テンポも守れない。リードーからもう少し正確なテンポとリズムを刻めるよう訓練せよ、とお達しを受けましてね。それで、どんな訓練をしたら良いか、考えたんです。決められたテンポで一定のリズムを刻んで所要時間で歩けるようにするため、拍子木の音を目安にしようと思ったんです。子どもの頃経験した夜回りを思い出して、この拍子木を始めたわけです」

その男性は、柘植と名乗り、その訓練なるものにつき詳しく話してくれた。柘植は、団地の南四班、つまり団地の南端近くに住んでいて、地域のオーケストラに所属していた。年明けの演奏会用に、ラヴェルの「ボレロ」を練習しているのだが、この曲では、コイル線付きの小太鼓であるスネアドラムが独特のリズムをほとんど全曲にわたって刻む。タンタタタン、タタタタンなど延々と続く。そのスネアドラムが彼の担当なのである。

どんな状況でもリズムとテンポを維持できるように訓練する必要がある。公園近くは地形に高低差があり、そこを歩いて息が切れてももリズムが乱れないよう、また、団地南端は平らなのでテンポに注意を集中するのに良いのだそうである。リズムがだいぶ改善されてきたので、最近ではテンポの訓練に力を入れていて、平地を歩く日が増えたのだという。同居している柘植の父親が老人会長なので、物置の点検を息子の彼が代りにやっていた、彼がその鍵を持っている。で、中にある机に中古パソコンを置き、携帯型電子メトロノームで記録した拍子木音をディスプレイ上に映し、リズムやテンポが正確だったかどうか、専用ソフトで点検していたのである。ひどい結果の時には、すぐにやり直すこともあったが、最近では上手うまくなって確認だけで終ることが多いという。

坂田が町内会の役員会にこの顛末を報告し

たのはいうまでもない。これを機に町内会で
夜回りのボランテアを募ったらどうか、と
いう案が出され実行することとなった。
柘植のチャキチャキは、正月を挟んでも続
いた。ボランテアの夜回りは、正月明け、
一月末には動き出すはずである。